

Title	Schotteliusにおける「ドイツ語の新時代」への構想： バロック時代の文法家の課題をめぐって
Author(s)	高田, 博行
Citation	大阪外国語大学学報. 72(1) p.39-p.65
Issue Date	1986-11-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81108
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Schotteliusにおける「ドイツ語の新時代」への構想

——バロック時代の文法家の課題をめぐって——

高 田 博 行

Schottelius' Konzeption von der neuen Epoche des Deutschen¹
oder die Aufgabe des barocken Grammatikers

Hiroyuki TAKADA

In der vorliegenden Arbeit wird nach dem Wesen der Sprachauffassung von Justus Georg Schottelius (1612–1676) geforscht, indem wir klarmachen, was "der größte Grammatiker des 17. Jahrhunderts" sich selbst wie auch seinen gelehrten Zeitgenossen zur Aufgabe machte, um den Boden für eine neue, ideale Epoche der deutschen Sprache vorzubereiten.

Zur Entfaltung der Muttersprache zum "Hochdeutschen" muß man —nach Schottelius— mit Erfolg die Sprachmischung bekämpfen, die Sprache in die Form der "Kunst" (d.h. der Grammatik) bringen und ihre Bestandteile nach den (von Schottelius festgesetzten) grammatikalischen Regeln im "vollständigen Wörterbuch" lückenlos erfassen.

Bei der Erörterung der Schottelschen Konzeption von der idealen Zukunft der Muttersprache handelt es sich im wesentlichen um die doppelte Beziehung von dem Grammatiker und der deutschen Sprachgeschichte. Einerseits zieht der Sprachtheoretiker beim "Nachweisen" der Vortrefflichkeit, Natürlichkeit und Reinheit des Deutschen vornehmlich dessen Geschichte heran, wobei die von ihm normierten Sprachformen wegen der vollkommenen Verwirklichung der "Grundrichtigkeit" mit denen der uralten Zeit identisch sind. Andererseits erkennt der Grammatiker gerade in der wichtigsten Etappe auf dem Weg zur Ausbildung der deutschen Schriftsprache die den barocken Gelehrten gestellten sprachlichen Aufgaben rechtzeitig und richtig; dafür erwirbt er sich tatsächlich in der Geschichte der deutschen Sprache große Verdienste.

1. 序

1. 1. 「17世紀の最も重要なドイツ語文法家」¹⁾もしくは「バロック時代の偉大な言語学者」²⁾と称

される Justus Georg Schottelius (1612-1676年) を論ずるにあたって、まずヨーロッパにおける母語の擁護と顕揚に触れねばならない。

母語がラテン語の絶対君主制とでもいうべき状態から解放される道を歩み始めたのは、14世紀の初めのイタリアにおいてである。すなわち、Dante Alighieri が『俗語論』³⁾を著し、生きた母語の「高貴さ」を訴えそれを理論的に根拠づけて以来、他のヨーロッパ諸国においても母語に対する目が開かれ、ついに15世紀の末には、母語に文法が「発見」された。⁴⁾『カスティリア語文法』⁵⁾が、ヨーロッパで最初の「俗語文法」としてイスパニアで世に出されたのである。人文主義者たちは、「神聖なる」言語であるラテン語・ギリシャ語・ヘブライ語の研究を深める一方で、「平俗なる」近代諸語の学問的把握にも尽力した。⁶⁾

そのような波がドイツにも及び、ドイツでも母語に対する意識に変革が起こることとなった。⁷⁾新約聖書の言語であるがゆえにラテン語よりもさらに尊厳があるとされていたギリシャ語や旧約聖書を著したが故に人類の祖語であると一般的に考えられていたヘブライ語との歴史的関連性や類縁性が、ドイツ語に好んで「証明」されたり、⁸⁾またそれどころかドイツ語が人類の祖語だとする主張がなされたりもした。⁹⁾さらに、Martin Luther の聖書翻訳によって、ドイツ語も神の言葉を言い表せるということが実証され、3つの神聖なる言語と同等の地位がドイツ語に保証されることとなった。そして、ドイツ語の文典を著すこと、つまりドイツ語も文法的記述が可能な言語であることを証明することも、ドイツ語の擁護と顕揚のために必要とされ、¹⁰⁾16世紀後半に、まずは外国人用のドイツ語文法書がラテン語で著され、¹¹⁾17世紀に入ると、ドイツ語の文法書が初めてドイツ語で著された。¹²⁾

しかし、17世紀前半のドイツは、30年戦争(1618-1648年)によって国土が荒廃と分裂の奈落へと陥り、他のヨーロッパ諸国が中央集権国への道を歩んでいたのと比べて、明らかに立ち後れ、また言語面でも、外来語の洪水がドイツ全土に、しかも社会的下層にまで浸透していた。この無常観漂うバロック時代に、Martin Opitz が『Buch von der Teutschen Poeterey』(1624年)のなかで、他国にすでに存在しているような国民文学をドイツでも育て上げる必要を唱えるのだが、そのためには、文学の表現手段である言語を——他国に劣らず、いや他国以上に——十分に磨き上げ、確固たる標準的ドイツ語を形成し、当然外来語氾濫も食い止めねばならなかった。このドイツ語の育成活動の担い手は、主として「国語協会」¹³⁾に属した学識者と宮廷貴族であった。国家的分裂、外的な荒廃の時代に、人は母語・民族語ないし国家語という内的な財産を精神的依り所とし、それに対する絶対的な評価と賛美は、30年戦争の末期の1640年代に、最高潮に達した。

1. 2. このようなドイツ語をめぐる状況のなかで、Schottelius が1641年にドイツ語文典を公刊して、学識界に登場し、その後ドイツ語文法の分野で主導的な地位を得るに至ったのである。本稿は、この Schottelius が、来たるべき「ドイツ語の将来」のために、文法家である自分自身そして同時代人が何を成すべきであると考えたのかを、——必ずしも体系的に叙述されてはいない——

Schottelius の論述から直接探り出して、Schottelius 自身に語らせつつ、Schottelius のドイツ語観の本質の解明に近づこうとするものである。バロック時代を代表する言語理論家のドイツ語観を明らかにしようと試みる本稿は、「バロック時代における言語観」の全体像の解明という究極的目標にアプローチするためのひとつの準備的考察でもある。

なお、本稿は、Schottelius の最初の著書である “Teutsche Sprachkunst”¹⁴⁾ (1641年) と、その補足と見なすべき “Der Teutschen Sprach Einleitung”¹⁵⁾ (1643年) に基づいて、Schottelius の思想を考察することとする。つまり、Schottelius がどのような思想と自意識を持って、学識界に登場したのかに重点を置きたいからである。ただし、後年の Schottelius の見解ないし発言の修正にも注意を向け、重要な修正については、必要に応じて本文または註において付言する。すなわち、1651年の “Teutsche Sprachkunst”¹⁶⁾ (第2版) と1663年の “Ausführliche Arbeit Von der Teutschen HauptSprache”¹⁷⁾ も、考察の対象に含むこととする。また、G.Krause (1855年) が収集した書簡¹⁸⁾、および Schottelius の文典成立と関係の深い Christian Gueintz の文典 “Deutscher Sprachlehre Entwurf” (1641年) から、本稿にとり重要な箇所を引用する。

2. ドイツ語との取り組み

2. 1. まず、1641年に Schottelius が文典を著したときの意図を見よう。「ドイツ語のことも自らのことも、ドイツ人自身がほとんど忘れ去ってしまった」(Schottelius 1641, Bl. x(2v)¹⁹⁾時代の風潮が、次のように語られている：

外国かぶれの心は、宿命的に特にドイツ人に生まれつき深く根付いているようである。外国の者たちは、ドイツ人のことを、[...] ただ何やら訳のわからないことをブツブツと言う無骨な者たちだと見なしている。さらにひとは、ドイツ語には1000の単語しかなく、そのうちの800はギリシャ語、ヘブライ語、そしてラテン語から乞食よろしくもらったもので、残る200が粗末なドイツ語の単語である、と思っている。そして、この主幹言語²⁰⁾のことを、理解も習得も不可能な言語だと思い込んでいる。(Schottelius 1641, Bl. x(3rf.)

このような「誤った評価」に対して、一般に同時代人たちは反論しようとしなが、²¹⁾「名のある民族はほとんどみな、この点については当然の気持ちとして、[ドイツ人とは]」正反対のことを成し、自らの言語の伸展と尊重に努めている」(Schottelius 1641, Bl. x(3v))のである。ローマ人、ギリシャ人、トルコ人、イギリス人、フランス人がみなそうで、ドイツでも、昔は、Karl 大帝や Rudolf 一世によってドイツ語が育成されたものであると、Schottelius は言う。そこで、17世紀中葉という時代の Schottelius が、ドイツ語の擁護と顕揚に一役買おうというのである：

およそ言語が有するべき特徴および能力として、〔…〕今までに学識者たちによって要求され賞賛されてきたところのものはすべて、我々の主幹言語にもある。いやただそのようなものがあるというだけではなく、他の言語には——言語の生来の特徴からして——まったく知られておらず、また知られることのできないような特別なもののまでが、我々の言語には多くあるのである。このことの証拠を、私は本文典のなかでさまざまにそして詳しく書いた。(Schottelius 1641, S.8)

このようにドイツ語の価値の高さを強調しようとするのは、言語共同体ないし国家の繁栄とその言語の繁栄との密接な関係を、Schottelius が認識しているからである：

教会と学校、法律と司法、戦争と平和、商業と交易、行いと振舞い、これらすべてが、我々のところで保たれ、行われ、伝えられるのは、まさにドイツ語を通じてである。我々は、ドイツ語を通じて神と天へ近づく。(Schottelius 1641, Bl.)(4r)

つまり、「言語は、すべての学識の、すべての技法 (Kunst) と学問の宝庫、人間の統一性のきづな」(Schottelius 1641, S.106) なのである。²²⁾従って、将来を担う「青少年にとって、ドイツ語を根本的に知りドイツ語を用いることができることが、如何に必要であるかについては、言うまでもない」(Schottelius 1641, Bl.)(4r) のだが、ドイツの「現状」では、青少年はドイツ語を誰からも教わらず、ドイツ語で重要な事柄を何も表現できないでいる。「外国語によらない限り、技法と学問に到達できず、そのため、最良の青少年時代がただそのような外国語の習得に費やされる」(Schottelius 1641, Bl.)(4v)。青少年に、ドイツ語を熟知させるという時代の最大の課題を果たすには、文法 ('Sprachkunst') が必要である：

ある言語をその基礎に従って熟知するには、その言語が技法という形に置かれていなければならない。しかるに、我がドイツ語は、あたかも規則正しい基礎もなければ、確固たる言語の技法つまり文法の、主たる分類事項も持っていないかのように、多くの人に思われ、そのため粗野なものとしてほとんど人の手に触れられないまま来てしまった。そのような不必要な不信の念が、本書によって大いになくされて、〔本来は〕完全な主幹言語であるドイツ語に名誉が与えられ、ドイツ語が救われれば幸いである。(Schottelius 1641, Bl. 4vf.)

Schottelius は、「我が母語の力強い能力」(Schottelius 1641, Bl.)(5v) を証明するために、そして将来的に学問と技法を初めとするさまざまな分野がドイツ語で十分に学べ表現できるようになることを目指して、まずドイツ語に文法を与えようとする。

ドイツ語との取り組みに興味をもち始めて、何かを成さねばならないと感じた当初の Schottelius は、実はまず「完全な辞書」を完成することを考えていた。それが、ドイツ語に関する先人たちの労作を読み進むにつれ、ドイツ語の確固たる文法がまだ作られていない、つまりまだ規則に基づく確実な基礎がドイツ語に与えられていないことに驚き、ドイツ語文典の完成にまず向かったのである。Schottelius は、その経緯を次のように振り返っている：

私は自分のなかで母語に対する関心が芽生えるのを感じて、すでに数年前から母語の単語や言い回しやその他の特性を観察し、新旧の書物を多く読み始め〔…〕、またギリシャ語、ラテン語、フランス語と比較して、ドイツ語に特別な卓越性があることをますます強く感じ取った〔…〕。これにより、私はますます勇気づけられ、〔…〕私の立てた目標を目指して尽力する気がいやおうにも増した。その目標というのは、最初は、ドイツ語という主幹言語の完全な辞書を作ることであった。〔…〕しかしながら、下に述べること〔ドイツ語の基礎を捉えるような完全な文法がまだ書かれてはいないということ〕に、初めは驚くばかりであった私は、後には〔…〕手早く我々の主幹言語に技法という形〔文法〕を与えようとするに至った。〔…〕このように私は思い、文法の必要性についてあれこれと思いをめぐらして、〔…〕次第に本文典を完成するに至ったのである。(Schottelius 1641,S.8-11)

つまり、Schottelius は、言語を文法的に確定することが先決で、その後で辞書の完成に取り掛かることを考えたのである。

2. 2. 次に“Der Deutschen Sprach Einleitung”(1643年)においては、言語変化と言語史の区分という問題に対する興味が、特に強く示されている。

「言語の衰退と変化を引き起こす主要原因」(Schottelius 1643, Bl. A6r)には、1) 万物を襲う「時間自体の推移」(ibid), 2) 「民族と居住者の混合」(「これによって、昔からの国言葉が異質化し、大部分死滅し、顧みられなくなるのが普通である」：Schottelius 1643, Bl. A6v), 3) 「一般の話し言葉における、気まま、不注意、軽率、無思慮、不確かさ」(Schottelius 1643, Bl. A6vf.) もしくは「大衆 (Pöbel) たちのありとあらゆる勝手」(Schottelius 1643, Bl. A7r), 以上の3つがある。²³⁾ このうち、ドイツ語の歴史においてドイツ語に「最大の損害と障害とを与えた」(Schottelius 1643, Bl. B2v)のは、第3の言語変化の要因、つまり人の不注意・無頓着である。このためにドイツ語は、「他の主幹言語のような完全で確固たる榮譽ある段階に達することが、今までにできなかった」(ibid)。一方、ギリシャ語やラテン語は、心ある学識者たちの育成のおかげで、「次第次第に高揚し大きくなり、技法と学問を表せる」(Schottelius 1643, Bl. 3r) ようになった。このように、言語変化の要因という観点からも、ドイツ語との積極的な取り組み、とりわけ文法を与える尽力の必要性が訴えられるわけである。

Schottelius は、ドイツ語史に5つの時代を設定した。これは、「言及するに値する最初のドイツ語史の時代区分」²⁴⁾である。まず第1の時代とは、「原初のドイツ人たちが、理性の合意と言語の根本から美しい単語を「…」それほどに多く造り、疑いもなく自らの言語をこよなく敬愛し、また自らの読み書きの仕方も有していた」²⁵⁾(Schottelius 1643, S.144)時代である。それは、年代的にはおよそ「3千年前」(Schottelius 1643, S.42)のことであった。²⁶⁾次に、第2時代は、Karl 大帝(800—814年在位)とともに始まり、「大帝自身が母語の養育を行い、文典を書き上げようと尽力し、古い韻を収集させ、それを自ら書き写し、風〔方位〕や暦月などに名を与え、ドイツ人たちに祖国の歴史を没落から守るためのひとつの道を示そうと考えた」(Schottelius 1643, S.144f.)のである。²⁷⁾第1時代がゲルマン語の時代に相当するのに対し、第2時代は真の意味でのドイツ語の始まる時代である。Rudolf 一世(1273—1291年在位)に始まる第3の時代に、「ドイツ語が成長し始め、この上なく賞賛さるべきこの王は、ドイツ語のためにニュルンベルクでわざわざ帝国議会を開き、そのおりに、今後はドイツ語がラテン語の代わりに法廷で常に用いられ、そしてすべての命令、布告、特権、持参金契約などは、「…」ドイツ語ではっきり示され、書かれることを可決した」²⁸⁾(Schottelius 1643, S.145f.)。引き続き、第4の時代は、Lutherとともに始まる：「ルター氏は、ありうる限りの快さと熱烈さと雷の動きとを、同時にドイツ語のなかへ植え込み、ありうる限りの無骨な重荷をドイツ語から取り去り、ドイツ人たちに「…」自らの言語が如何に素晴らしい能力を有しているかを示した。そして、この時代にドイツ語が如何に至るところで大きくなり、磨かれ、豊かにされたかは、感じ取れるはずだ。そのことは、年々出されるさまざまな文書の類を見れば、明らかであるから」(Schottelius 1643, S.146)。そして、ドイツ語史上の17世紀後半を、Schottelius は「ドイツ語という主幹言語の最も名誉ある時代」(Schottelius 1643, Bl.A3r)にしようとする。この「今の」時代に、会長 Ludwig von Anhalt-Köthen 侯を中心とする「実りを結ぶ会」²⁹⁾の人々が、「母語が生まれつきもっている最も純粋な洗練という衣を母語に着せて、外国語の異質な重い束縛から母語を解き離す方法を、ドイツ人に示し」(ibid), ドイツ語を「基礎のしっかりした完全な状態へ」(Schottelius 1643, Bl.A2r)もたらす努力をしているのであり、Schottelius 自らもその尽力に参加するのである。Schottelius の考えるドイツ語のあるべき将来像は、次のようである：

第5の、そして最後の時代は、墮落をもたらす外国語のぼろの継ぎ剥ぎがドイツ語から一掃され、ドイツ語の生来の潤いと純潔とが保たれ、同時に、正しい規則的な一貫した基礎および組織が立てられて、次第に技法と学問とが母語で読まれ、理解され、聞かれるようになる、そのような時代に当たるであろう。(Schottelius 1643, S.146f.)

さて、以上に概観したような Schottelius におけるドイツ語の擁護と顕揚、ドイツ語文典および辞書の完成という問題を、以下でさらに掘り下げて論じよう。

3. ドイツ語の卓越性の「証明」

3. 1. 言語はそもそも、どのように誕生したのであろうか。Schottelius は、創世紀に従い、「太初言語 (Ertzsprache)」つまり人類最初の言語は、神がアダムに与えたと考える：

神は全自然を、言語という術により囲い込んだ。そう、言語には自然のすべての秘密が通っている。従って、真に言語に精通する者は、同時に言語により自然のなかを旅し、技法を見だし、学問をつまびらかにし、[...] そして神自身と話し神に相談を仰ぐことができる。
(Schottelius 1641, S.106)

アダムは、この「まったく完全な太初言語」でもって、「それぞれの事物の真の特徴を写し取りつつ、すべての事物に名を与えた」(Schottelius 1641, S.61)。元来、語と事物とは、本質的に一致した関係にあるべきものである。このように、言語の本質に関して、名は人間の同意・約束により決められているとするノモス説 (慣習説) ではなく、名と物の間には本源的で必然的な関係があるとするピュシス説 (必然説) を、Schottelius は採る。³⁰⁾

このまったく完全な太初言語は、[...] ノアとその子孫たちが保ち続けたのであるが、[バベルの塔で] 神の全能により引き裂かれ、だいなしにされ、さまざまななりに分断されてしまい、お互いの間で全く理解がされなくなってしまった。(Schottelius 1641, S.61)

この時に、69の「主幹言語」が生まれた (vgl. Schottelius 1641, S.62.)。太初言語は、この際になくなりはず、ヘブライ語として残存した (従って、一番古い言語である) という考え方が、当時一般的であった。しかし Schottelius は、この考えを採らず、太初語は消滅してしまったとする P. Clüver (1580—1623年) の説を、「十分にしっかりした根拠がある」(Schottelius 1641, S.57) と考え支持している。つまり、「ヘブライ語の起源は、今知られている他のすべての主幹言語と同様に、バベルでの混乱より先に求めることはできない」(ibid) とするのである。³¹⁾

ドイツ語の第1時代は、このバベルで始まる。ノアのひ孫にあたるアシケナズが、この「主幹言語」のひとつであるドイツ語をヨーロッパへ持ち込んだ結果、ドイツ語がヨーロッパの大部分を覆うこととなった。その際 Schottelius は、太古のドイツ語とケルト語とを同一視しているのである。³²⁾

今や唯一普遍の言語が分断され、人間が世界じゅうに分散されたあと、アシケナズが自らの部

族の家長として部族のもの全員とともに小アジアを通りヨーロッパへ進み、その地に定住し、国を分け、国を建て、ありとあらゆる整理をして、すべてのケルト民族の父となった〔…〕。このアシケナズがドイツ人の父であり、古ケルト語つまりドイツ語をバベルからもたらして、この言語をヨーロッパの国々に自らの子孫たちを通して広めたのである。³³⁾ (Schottelius 1641, S.62f.)

主幹言語であるこのドイツ語（「ケルト語」）よりも古い言語はヨーロッパにはないのであるから (vgl. Schottelius 1641, S.56f.), ヨーロッパ諸語のなかではドイツ語が一番神に近いということになる。バベルでドイツ語と同じように生まれた残りの68の言語にも、ドイツ語と同じ古さが認められるはずであるが、Schottelius は、ヘブライ語を除いてはそれらの言語の年齢に一切言及せず、つまるところ、「愛国主義的な無批判性」³⁴⁾をもって、ドイツ語が唯一ヘブライ語と同じ古さの由緒ある言語だという叙述を行う。³⁵⁾ 他国のような国民文学の伝統がない当時のドイツにとって、まずは「歴史」に基づいて母語の卓越性を主張することが、最も好都合であったのである。³⁶⁾ 「始まりと基礎づけに際して神の協力があつた」(Schottelius 1641, S.84.) ドイツ語は、他のどの言語にもまして自然で本源的である。「ドイツ語は自らのなかに何か神的なものをもっており、またあたかもそのような神性が〔ドイツ語の〕文字〔音声〕³⁷⁾と個々の単語のなかに感ぜられる」(Schottelius 1641, S.39)。「我々の主幹言語は自然とともに歩んで」(Schottelius 1641, S.193) おり、「ドイツ語の単語が最も本源的に」(Schottelius 1641, S.86) 事物を表現すると主張するのである。

純粋性も、言語の卓越性を主張する根拠となる。既述の言語変化の第2要因、つまり他民族との接触による言語変化をドイツは、「ドイツ語以外の言葉を話す外来民族に征服されずに来たので、特に被らずに済んだ」(Schottelius 1643, Bl.B1rf.)。それどころか、ドイツが「逆に、フランス、スペイン、イタリア、シチリア、そしてアジアとアフリカのかなりの部分を征服し、そこに住い、そこを支配し、そこにケルト語〔ドイツ語〕の流儀と魂を散布し植え込んだ」(Schottelius 1643, Bl.B1v)のである。従って、ドイツ語と他のヨーロッパ諸語との間に見られる類似性についても、³⁸⁾ 「すべてのヨーロッパの言語が、この純粋で由緒あるドイツ人の主幹言語から、多くの根と単語と樹液と力と精神を受け取った」(Schottelius 1641, S.153)からだと説明する。これにより、Schottelius は、それまでのギリシャ語とラテン語の優先に反撃する：

今までは人は、ほとんどすべてをギリシャ語とラテン語から——あたかも事物の普遍性が唯一そこにおいてのみ根拠づけられているかのように——引き出し、そこから証明しようと一生懸命に努めてきたけれども、今や逆にドイツ語がヘブライ語との一致により、ギリシャ人とラテン人に明りを照らし、かれら自身の隠された起源と発生を見いだしてやらねばならない。³⁹⁾ (Schottelius 1641, S.38)

また、ドイツ語の語根を知らないために、フランス語の単語の由来を誤ってギリシャ語とラテン語に求めて、「うまく行かず苦しんでいる」(Schottelius 1641,S.154) フランスの文法家たちのことを、Schottelius はあざける。当時のドイツにおける外来語氾濫の大部分を占めたフランス語も、実は語彙をほとんどドイツ語から借りたというのである。

このような名誉ある純粋な歴史をもつドイツ人が、ドイツ語を「今日、しばしば思慮のない恥ずべき外国かぶれの心から、これほどにまったく不明瞭にし、貧しくし、乞食よろしく奴隷と成し、〔ドイツ語の〕相当部分を根絶やしにして、〔…〕外国語の断片を差しはさむことによってドイツ語をドイツ語でなくし、ドイツ人の魂を異質なものに変えている」(Schottelius 1643, Bl.B2r) , この現状をドイツ人は大いに反省し是正すべきであり、Schottelius が第5時代の構想のなかで、「外国のぼろの継ぎ剥ぎを一掃し、ドイツ語本来の純潔を保つ」(Schottelius 1643,S.146) ように同時代人に訴えかけたのも、この意味からである。

3. 2. Schottelius にとって、言語は樹木のような有機的構造物であり、その言語という木を構成する要素が単語である。当時のドイツの文法論においては一般に統語論はまだ重視されてはおらず、文ではなく「単語が言語を作る」(Schottelius 1643,S.41) ののである。それで、Schottelius は単語の学問的観察を深めて、単語をさらに構成要素に区分し、数種類の要素を設定した(詳しくは、4.2.参照)。そのなかでも最も重要な要素は、'Stammwort' つまり語根である：

わが主幹言語という成長物は、実を結ぶ立派な木にたとえられる。その木は、樹液豊かな根を大地のなかへ深く、そして大地のなかで遠く広々と延ばし、大地の水分と髄質を小さな葉脈によって引き上げ、〔…〕自らを自然のなかへ植え込んでいる。というのも、我々の言語の根と樹液豊かな語根とは、その中核と髄質とを理性から吸い取り、自らを自然の大基礎の上へ置いたのであるから。(Schottelius 1641,S.99)

Schottelius は、ドイツ語の歴史性と並んで、ドイツ語の単語の、とりわけその中心たる語根の、卓越性を、ドイツ語という言語の卓越性・完全性の主張の根拠として打ち出す。「語根の完璧な完全性」(Schottelius 1641,S.75) の条件は、次の5点である (vgl. ibid):

1. 語根が、異質な文字〔音声〕のなかになく、固有の自然な文字のなかにあること。
2. 語根の響きが快く、表現されるべき事物を本源的に表現していること。
3. 語根の数が、完全で十分あること。
4. 語根が自らから、豊かに派生をさせること。
5. 語根が、あらゆる種類の結合、合成そして方法にかなった組み合わせを導くこと。

ここでドイツ語の優秀性を証明するために求められている条件は、ドイツ語の音声と語根の自然性・本源性（第1点・第2点）、語根の量的豊富（第3点）、そして派生力と合成力の強さ（第4点・第5点）である。

まず、自然性については、Schottelius は、今日言うところの「音響模写 (Klangmalerei) 」と「音声象徴 (Lautsymbolik) 」の原理によって、それを証明している。音響模写は、次のように説明されている：

ドイツ語の単語が最も本源的に事物の特性を表現するが、この特別な性質はドイツ語においてはさらにあまねく存在しており、例えば、落下、衝撃、発射、飛躍、衝突、叫び等の音が、ぴったりの音声語 (Lautwort) で表される。(Schottelius 1641,S.645)

また、Schottelius が、動物の鳴き声を表現する単語がドイツ語に多いことを言うのも、音響模写の原理に基づく自然性の主張のひとつである：「例えば、der Lew Brüllet, der Ochse Bölcket, [...] der Sperling silcket und zircket 等と言う場合に、何という力強く短い発音と快い響きをもって、最も内なる特性の命に従って、そのドイツ語は耳に入ってくることであろうか」(Schottelius 1643, S.81)。音声象徴の原理に基づいては、例えば、「r という文字 [音声] の快い硬さによって鎧が砕かれる感じが、そしてシュッと音を立てる s の連続によって剣の輝きと光とが鋭く近づいて来る感じが、なんと生き生きと伝わってくるのか」(Schottelius 1641,S.91) のように言われる。また、語根がすべて一音節であることも⁴⁰⁾、語根の自然性の根拠のひとつである。子供は、「初めは一音節の語を口に出すことを学ぶ」(Schottelius 1641,S.88) のであり、「我々の記憶は短く即座なので、その説明も短く速く純粋で、聞き取り易く響くのが最も良い」(ibid)。しかも、神の恵みのおかげで、「ドイツ人は、唇、舌、歯、喉を用いて、ほとんど無限の数の一音節語を発音できる」(ibid) のである。

次に、語根の数についてはまず、オランダ人⁴¹⁾ S.Stevin (1586年) の示した——当時よく知られていた——具体数が、引用されている：「Simon Stevin は、ドイツ語から一音節の語根を2170集めた。一方、ラテン語ではそれは163、ギリシャ語では265であった。」(Schottelius 1641,S.88) Schottelius はしかし、実際にドイツ語の多さを証明することは、「本来辞書のなすべきことからである」(Schottelius 1641,S.93) とし、「その数は数千にまで延び、どの言語にも劣りはせず、まさるものである」(ibid) と述べるにとどめている⁴²⁾。また、派生力と合成力の強さを、Schottelius は派生語と合成語の数多さによって示そうとした。Schottelius は自ら、約2000の派生語を派生語尾別に収集し (Schottelius 1641,S.308-343)、「ここに集めた派生語は全体のほんの一部に過ぎず、[...] ドイツ語の派生語の数は非常に豊かで多いので、完全な辞書からこれを学ぶ必要がある」(Schottelius 1641,S.304) としている⁴³⁾。合成語についても、全部でおよそ2000語を集めている (Schottelius 1641,S.349-395) が、ドイツ語の合成能力と「同じものを、いわんやそれ以上のもの

を、他の言語に見て取ることは、言語の性質からして決してありえず」(Schottelius 1641, S.135f.), 普通合成力の強い言語だとされる「ギリシャ語は、ドイツ語の次に来るもの」(Schottelius 1643, S.99) にすぎない。Schottelius は、特に合成語を造ることによって各種の専門語彙を豊かにできることを意識しており (Schottelius 1643, S.99), ドイツ語が十分に専門表現のできる言語であることが、とりわけこの方法によって証明されると考えた。

なお, Schottelius は、時とともに「ドイツ語において、多くの語根が喪失され、用いられなくなった」(Schottelius 1643, S.42) とし、語根の数の減少を指摘するが、その失われた語根が固有名のなかに潜んでいて、「多くの町、山、川、森、女性、男性等の、今なお用いられている名前から読み取ることができる」(Schottelius 1643, S.42f.) ということに、注意を促している。これは、今日的に言えば、通時的に孤立化した語根で、「一度限りの形態素 (unikales Morphem)」を、Schottelius が認識していたとも解釈できよう。⁴⁴⁾

4. 文法による確定

4. 1. Schottelius は、「日常の話し言葉 (altages Rede) もしくは一般大衆の慣用 (Pöbelgebrauch)」(Schottelius 1643, Bl.B3r) と「言語それ自体」(ibid) とを区別する：

ドイツ語で語りドイツ語が分かることと、ドイツ語を根本から熟知して自由に操れることとの間には、大きな違いがある。というのも、日常の慣用は、ひとがゆりかごにいますときから流し込まれ、ひとりでに習得されるが、言語〔自体〕は、勤勉と熟考を通じてのみ習得の道が開けるものであるから。(Schottelius 1643, Bl.B4v)

本来の言語、あるべき言語は、「一般大衆」には期待すべくもなく、言語研究者が言語の基礎・規則を明らかにし、それを体得するように学識者が努める必要がある。話し言葉に対し不信の念を抱く Schottelius にとって、ひとは言語を「語る」のではなくて、言語を「用いる」のである。⁴⁵⁾ ギリシャ語もラテン語も、「その基礎と規則」(Schottelius 1643, Bl.B2v) とが学識者の努力によって明らかにされて初めて、あのように立派な言語となったのである。ドイツ語の場合も、ドイツ語をその「確固たる基礎」(Schottelius 1643, Bl.B3r) から観察しない限り、どんな育成の努力も結局は無駄に終わってしまう：

我々の言語は最も確かな基礎の上に確固と立ち、自然の根のなかへ植え込まれているのであるから、我々ドイツ人が我々の母語を、地方によりさまざまに用いられ無知な者によりいろいろな使われ方をしている状態に基づいて計り、説明するならば、我々の言語のなかに、不確かな

錯乱したものを築いてしまうことになるであろう。(Schottelius 1641,S.4)

先人たちは、「百年以上の間に、さまざまなドイツ語の文典、修辞書、表現集 (Formulenzbuch)」(Schottelius 1641,S.174) を出してきたが、このドイツ語の「確固たる基礎」ないし規則を解明して、「技法に従った (kunstmäßig) 確実さ」(Schottelius 1643, Bl.B3r) つまり真の「文法」をドイツ語に与えることに成功せず、「ただ秩序のない秩序とほとんどむなしい内容と」(Schottelius 1641,S.174) を書き綴ってきたにすぎないと、Schottelius は考える。まさに、Schottelius の世代が、その課題を担っているのである。言語の歴史にとっての人間の意識的努力の意味、つまり言語が前進する際の言語共同体の「勤勉と努力」の重要性を Schottelius は強調する。とすれば、言語の変化には、一般大衆の不注意・無頓着を通じての墮落の方向への変化と並んで、学識者の意識的取り組みを通じての（墮落から本来あるべき言語の姿への）改良の方向への変化とがあることになる。Schottelius は、この改良的变化の推進の人為性を重視するが故に、Karl 大帝, Rudolf 一世, Luther の果たした役割を基準にしてドイツ語史の時代区分を行ったのであり、そして来たるべき時代のために、同時代人が「正しい規則的な一貫した基礎および方法を置く」(Schottelius 1643, S.147) よう尽力することを呼びかけ、自らが文法家としてそれに挑み、勝ち取ろうとするのである。ドイツ語の根本的規則を確定できたと信ずる Schotteliusこそが、Schottelius 自身の理解によれば、事実上初めてのドイツ語文法家なのである。⁴⁶⁾ Schottelius は、初めは見るも哀れであったラテン語が、「天の恵みと何人かの学識者あるローマ人の手によって、立派にそして完全になった」(Schottelius 1641,S.69) ことを模範として、自らもドイツ語に対して同じことを行おうとするのであり、自らをとりわけローマの文法家 Varroに見立てている。⁴⁷⁾

4. 2. 「言語の主要規則、つまり言語の基礎」(Schottelius 1641,S.3) は、「言語を成す」(vgl.3. 2.) ところの単語を構造的に分析することから規定できると、Schottelius は考える。すなわち、3種類の語構成要素、「語根」、「派生の主要語尾 (Hauptendung der Abgeleiteten)」、「偶性語尾 (zufällige Endung)」を区別し、これに基づいて言語の規則を引き出そうとする。⁴⁸⁾ 語根には、理性と自然とが内包されており、「我々が到達できる最も深いものは、そのような一音節の根、つまり基礎のしっかりした語根」(Schottelius 1641,S.71f.) であるが、しかし「枝も葉も持っていない木を、実りを結ぶ木と呼べない」(Schottelius 1641,S.102) のと同じく、語根があるだけでは言語として不十分であり、それから語をさらに派生させる特定の語尾が必要となる。その「派生の主要語尾」も、「一音節である」(Schottelius 1641,S.100)。「偶性語尾」は、今日的に言えば屈折語尾と比較変化語尾とに相当するが、この「偶性語尾」が一音節であるかどうかは、言われてはいない。⁴⁹⁾ この3要素「の上に、ドイツ語はまったく確実に基礎が置かれ建てられている。[...] これらの〔要素の〕区別に注意せねばならない。なぜなら、この区別から多くの確かな規則が生まれ、見きわめられるのであるから」⁵⁰⁾ Schottelius 1641,S.192)。Schottelius が理論的には決して認めてはい

ないが、実際には認めている第4の語構成要素として、「前詞 (Vorwort)」がさらにある⁵¹⁾。例えば具体的には、*unverantwortliches* という語を Schottelius は、*un*, *ver*, *ant* がそれぞれ「前詞」, *wort* が「語根」, *lich* が「派生の主要語尾」そして *es* が「偶性語尾」であると説明する (vgl. Schottelius 1641, S. 102f.)。さらに Schottelius は、語根同士の結合つまり合成という語構成法を非常に重視する。単語が言語を成すとする言語観にとっては、この合成法が最もダイナミックな語形成の方法である。語根だけでは、命名されるべき多様な事態を十分には表せず、「常に、派生語そして合成語によって助けの手を差し伸べてもらわねばならない」(Schottelius 1641, S. 107) のである。

言語は規則的な構造を成しているはずであるという、このような類比的 (analogisch) な言語観は、Schottelius の時代の全般に見られる「体系的思考 (Systemdenken)」と関連している⁵²⁾。この言語観に従えば、時とともに隠されてしまったその言語本来の類比性を見つけ出すことが、文法家の課題である。この類比性を表現するために、1643年以降の Schottelius は、'Grundrichtigkeit' / 'grundrichtig' を用いようとしている⁵³⁾：

この我々の母語がまた、韻律論と詩学に関して、完全な確実さという目標に行き着き、このなかに見られるその〔母語の〕——天の恵みにより最も確かに植え込まれた—— Grundrichtigkeit (基本的法則性) が広く知らされ広く益とされることを、多くの人が強く望んでいる。(Schottelius 1643, S. 61)

自らの母語の指導的な力と grundrichtig な (基本的法則性を有する) 力量を、賢明さと判断力により探り出し〔…〕隠された宝を知らしめることは、何故ドイツ人には許されていないのか、何故名誉とはならないのか。(Schottelius 1643, S. 143)

Schottelius は、ある特定の言語慣用を模範的言語形態だとは見なさず、語構造分析という言語理論的考察もしくは思弁から、あるべき言語形態を引き出し、不確かなものをすべて規則化しようとする。この言語規範観は、——当時最も権威があると認められていた——上部ザクセン・マイセン方言という言語慣用に基づいて正しいドイツ語を規定する文法家 Christian Gueintz (1592年-1650年) の規範観と、真っ向から対立することになる。実は、1641年に出されたこの Gueintz の文典 "Deutscher Sprachlehre Entwurf" を、「ドイツ語の完全な基礎を与えるものであるとか、まったく正しい指導書であるとは認められない」(Krause, S. 246) と考えた Schottelius が、この Gueintz の文典に対抗するために同じ年に出版した文典が、"Teutsche Sprachkunst" なのであった。つまり、ギリシャ・ローマ時代以来の Analogist (合則論者) と Anomalist (変則論者) との論争が、17世紀のドイツで繰返された訳である⁵⁴⁾。後者の立場の Gueintz によれば、言語は「元来書物から習得されるのではなく、習慣が言語を教え、押し進め、養ってきたのである。〔…〕慣用が主導的で

あるべきで、——言語の性質にさからって——規則が慣用よりも優先されるべきではない。なぜなら、規則は慣用から作られるのであるから。」(Krause, S. 253f.)

「正しい」語形についての、Schottelius の規定と Gueintz の規定との相違は、⁵⁵⁾ とりわけ *e* 音の有無をめぐる。例えば、ドイツ語の語根はすべて一音節であるとする Schottelius にとって、動詞の語根は当然一音節である。その語根は実際にそのままの語形でどこかに存在せねばならないのであるが、それを動詞の命令法形であると決めることによって、Schottelius の理論は首尾一貫する：

この命令法がドイツ語の場合、第一の法であり、自らのなかに語根文字だけを含む正しい語根である。そして、この命令法から動詞全体が活用変化する。素晴らしいことに、動詞の語根つまり命令法は一音節である。[...] ひとが誰か別のひとに何かを言い、命じ、要求し、頼むときに、——赤子の片言でもわかるように——最も短く、ひとつの音で語るのが、いわば自然な語りかけの始まりであるから。(Schottelius 1641, S. 413)

一方、Gueintz はマイセンの慣用に従って、*liebe*, *siehe* のような *e* のある命令法を指定する (vgl. Gueintz, S. 70, S. 72)。また、Gueintz が「正しくて良い」(Gueintz, S. 61) とする *Ich bet zum Herren*。における *bet* のような *e* なしの (またアポストロフィーもない) 動詞の 1 人称単数現在形を、Schottelius の語分析は認めない。なぜなら、命令法以外の動詞の語形は必ず語根に屈折語尾 (「偶性語尾」) が付いたものでなければならないから。そのような語形が時折見られるにしても、「それは本を見る人の不注意、書き手の軽率または思わぬ誤用から起こるもので、それを文法において規則とはしてはならない」(Krause, S. 251)。同様に、Schottelius は、「*el* と *er* で終わる名詞は、複数形で *e* を付けねばならない。例えば、*Bürger*, *Bürgere*; [...] *Himmel*, *Himmele*。」(Schottelius 1641, S. 290) という規則を示す。これについて、Schottelius は *e* のない複数形のほうが慣用的であることを認めるが、「しかしドイツ語の主要な基礎と自然な悟性に従うならば、そのようなことは誤りであり、誤用によって忍び込んだものだということがわかる」(ibid)。一方、Gueintz にしては、このような *e* は、不必要な「語末音添加 (Paragoge)」か「誤用」かのいずれかであり、「優美さ」と「慣用」からして、許されないものである (Krause, S. 255)。

なお、変化のなかに「無限の永遠性の写し絵」(Schottelius 1641, S. 56) を見て取ろうとする Schottelius は、⁵⁶⁾ 言語についても、「言語それ自体」は変わらないと考える。つまり、表面的な音声的变化の背後にあって、不変の「確固たる基礎」は、時間の推移を超越して同一であり続ける。従って、表面的には歴史的変化を見せているドイツ語についても、誕生の際に神が関与した原初のドイツ語が、永遠の相のもとに実はまったく変化しないで今も存続していると、Schottelius は主張してやまない。この言語の基本的構造が不変であることも、Schottelius の言語観察の出発点かつ中心である語構造が不変であることによって「証明」されるのである：

我々のドイツ語という母語が、[...] 太古の祖先たちが用いたまさにその言語であるということは、言語自体から簡潔に証明することができる。すなわち、かつて昔のドイツ語において知られ、ふつうに用いられたところの、(1)まさに語根を、(2)まさに派生の主要語尾を、(3)まさに合成の方法を持ち、保っているその言語[今のドイツ語]は、以前の昔の言語[ドイツ語]と同一である。(Schottelius 1643,S.41)

5. 標準語の形成

5. 1. Schottelius は、早くから、どのような原理のもとに辞書が編纂されるべきかについて考えていた。この辞書論については、元来1641年の文典の「最後の賞賛の章[第1巻の第10章]で詳しく、私の考えを述べる」(Schottelius 1641,S.9) はずであったが、Gueintz の文典にできるかぎり早く対抗作を公刊したいという事情から、⁵⁷⁾ Schottelius はこの章を書かないまま自らの文典を出版した。⁵⁸⁾ しかしながら、その2年後の1643年には、⁵⁹⁾ 「完全な辞書を完璧に作り上げる」(Schottelius 1643,S.111) ための7項目⁶⁰⁾を提案している(vgl. Schottelius 1643, S.111-113):

- 1) ドイツ語にあるすべての語根を集める、
- 2) どの名詞にも、性、格、複数形を示す、
- 3) それぞれの語根のもとに、それから作られる派生語を示す、
- 4) 合成語を、その「基礎語」⁶¹⁾が語根として挙げられている項目内に示し、ドイツ語の合成力の大きさを示す、
- 5) 「前詞 (Vorwort)」を集めその能力を示す、
- 6) 動詞には、規則変化か不規則変化かを示して、現在形の1人称・2人称形、過去形、分詞形を挙げる、
- 7) 語義をその根本から説明する(そのためには、ドイツ語で書かれた著述物に隅なく当たり、そこでの用例を調べねばならない)。

つまり、語根を中心に語構造を観察し語親族に従って語彙を整理し登録すること(第1点、第3点、第4点、第5点)、文法的情報を与え正しい変化形を示すこと(第2点、第6点)、そして実際の用例に基づいて語義を説明すること(第7点)が、要求されている。このような完全な辞書が、「いつの日にか作り出されるならば、[...] 我々の気高い母語を、ギリシャ語やラテン語やフランス語が賞賛されて置かれているような地位へ、次第次第にまた確実に押し上げることができるであろう」(Schottelius 1643,S.113f.) と、Schottelius は考え、後年(1663年)には、ドイツ語の「第

5 時代」の構想のひとつに、辞書の完成をはっきりと付け加えたのである (vgl. Schottelius 1663, S. 49, § 59)。

Schottelius の理解では、「完全なドイツ語辞書は、いまだ現れてはいない」(Schottelius 1643, S. 109)。Schottelius は、例えば Georg Henisch の "Thesaurum Linguae et sapientiae Germanicae" (1616年)のことを、確かに有用な辞書ではあるが、「語根の位置、また派生語と合成語が、しばしば見落とされ見誤られている」(Schottelius 1643, S. 110) という決定的な欠陥のある辞書だと見ている。Schottelius の考える辞書は、単にアルファベット順に語を配列するのではなくて、語彙全体の構造を——語親族という観点下で——体系的に示すようなもの、換言すれば、言語の法則性に目を向けたもの、であらねばならない。完全な辞書を作る仕事は、「ひとりの人間には成すのが困難」(Schottelius 1641, S. 114)であり、「ドイツ語を愛する学識者たちが力を合わせること」(Schottelius 1643, S. 113f.) が必要である。Schottelius 自身は途中で (1647年の時点で)、「公務その他の用件の忙しさのため、約束した辞書は作ることができない」(Krause, S. 384) と、自らが辞書づくりに携わることを一度は断念したが⁶²⁾、1663年には、約5000の語根を集め、上記の2から7までの要請をある程度満たすような小さな辞書の作成の試みを示した (vgl. Schottelius 1663, S. 1277 – 1450)。そして、Schottelius の語根主義の原理に従ったドイツ語辞書は、1691年に Kaspar Stieler により、「Der Teutschen Sprache Stammbaum und Fortwachs」 というタイトルで公刊されることになる。

5. 2. Henisch の時代とは違う歴史的条件が、17世紀の後半にはあった。すなわち、17世紀の半ばになってようやく、標準語の形成が完結へ向かい始め、今や言語上の平均化・標準化というものが、辞書の目標であり、かつその前提となり⁶⁴⁾、文法により確定されたものをさらに確実にするために、辞書に登録して固定化を計るという課題が、辞書編纂家に与えられた⁶⁵⁾。つまり、ドイツ語の 'Grundrichtigkeit' を辞書に登録し、それを人に広く知らしめ、確実にし、将来に伝えねばならないのである。

これに関連して、'Hochdeutsch' に関する Schottelius の発言を、1641年から1663年まで跡づけ比較すると、Schottelius の標準ドイツ語観の変遷という、本稿のテーマにとって非常に重要である事実が浮かび上がる。まず1641年には、1箇所でも手短にしか、'Hochdeutsch' について論じられていない。ここでは、'Hochdeutsch' がその普及と一般性のゆえに、——それ自体の言語的性質もしくは価値とは別に——低地ザクセン方言やオランダ語と比べて優位にあることが確認されている：

私が高地ドイツ語ないし高地ドイツ方言として理解するのは、もちろん高地ドイツ人たちが用いているのだが、しかしドイツ帝国自身が議決文、官庁、そして印刷所において、何年も前から用いているもののことである。低地ザクセン方言そしてまたオランダ方言のほうが、高地ド

イツ語よりも、正しい基礎と本源的な状態に近いことが多く、また単語も豊かで、快適さが劣るわけでもない。しかし、高地ドイツの方言がドイツの共通のメルクリウスであり、また最良の洗練と動力がここにあり、ドイツの特質がここに最も快適な完全さを得ているので、我々は今やドイツ全土においてこれを範としよう。オランダ人たちは、洗練した書き方、優美・繊細で甘美なうまい語り方をするのではあるが、彼らは高地ドイツ人たちに、優先権を譲らねばならない。(Schottelius 1641, S.177f.)

'Hochdeutsch' が Schottelius 自らの文法的確定ないし尽力とどのような関係を持っているかについて、ここではまったく触れられていない。歴史ある由緒正しき「主幹言語」たるドイツ語を、基礎づけ規則化し、ドイツ語も「文法」の形で把握できることを例証し、ドイツ語を顕揚することが、1641年の Schottelius の最大の関心事であり、'Hochdeutsch' の問題は、その後に続くべきな問題であったと言えよう。

1651年になると、'Hochdeutsch' の性格づけは詳しく行われ、今や 'Hochdeutsch' が、「本書の企てに際し目標に定められる」(Schottelius 1651, S.319) ところのものであり、Schottelius は、自らの類比的な文法原理によって(まだまだ改良の余地のある)'Hochdeutsch' を規範化して、'Hochdeutsch' を完全に(ドイツ語本来の)'Grundrichtigkeit' と一致させようとする：

我が広大なるドイツ語という主幹言語においては、高地ドイツ方言こそ、Grundrichtigkeit が植え込まれ、技法にかなった使用がなされ、あらゆる洗練、技法、賞賛、光彩そして完全が求められ、見いだされ、保たれ、伝えねばならないところの唯一の方言であるであらうし、また、そうであることができ、そうであらねばならないところの唯一の方言である。(Schottelius 1651, S.321)

'Hochdeutsch' を文法的に磨き上げて、将来的に、'grundrichtig' な言語にする、つまりあるべきドイツ語の具現であるように 'Hochdeutsch' を育成することを、Schottelius は目指すのである。⁶⁶⁾ 'grundrichtig' にしなければならないという意志は、Schottelius が1651年に最も強烈に一義的に、類比的な言語規範化原理を押し通していることと対応している。それは「国家語」の形成に向けて 'Hochdeutsch' に完全な文法的確定を行うためである。

さらに、1663年になると、'Hochdeutsch' は文法によって将来的に 'grundrichtig' にされねばならない対象であることを越えて、'Grundrichtigkeit' がすでに現在それ自体に具現されている言語形態だと見なされるのである。文法面では、'Hochdeutsch' はすでにまったく正しいドイツ語なのである。'Hochdeutsch' において、「今や例外のない Kunstrichtigkeit [文法にかなう規則性を有すること] が現れ出て」(Schottelius 1663, S.174, §7) おり、以前にあったようなひとの不注意・思い付きによる「Ungrundrichtigkeit はすべて、まずは高地ドイツ方言において無くされている」

(Schottelius 1663, S.175, § 9)。まったく 'grundrichtig' であるならば, Schottelius の定義に従い (vgl.4.1.), 'Hochdeutsch' は「ドイツ語そのもの」という表現を得てもよいことになる:

我々が扱い、また本書が目標に置いている高地ドイツ語とは、一方言ではそもそもなく、学識ある人たちに見られるようなドイツ語それ自体である。賢明なひとや経験豊かなひとたちがこのドイツ語そのものをついに取り戻して、現在用いている。(Schottelius 1663, S.174. § 8)

ここで、ドイツ語そのものを「ついに取り戻した (receperunt)」と、完了形で言われていることが重要である。Schottelius のドイツ語史理解に従って、本来のドイツ語自体は原初の時代にあったもので、それがようやく3千年のちに、しかもいかなる方言からも超越して、このような形でようやく回復されたわけである。1663年には、'Hochdeutsch' が頻繁に口にされ、1641 / 51年では「アウグスト侯への献辞」において一度も 'Hochdeutsch' という語は出されないのに対し、1663年では同じ「献辞」でこの語が何度も用いられているのが目立つ。

つまり、1663年には、'grundrichtig' な本来的な(理想的な)ドイツ語が、'Hochdeutsch' という、方言を超越した言語形態として回復されたことを宣言し、残る課題は、この 'Hochdeutsch' を語彙の豊富化や辞書の完成を通じて、光り輝く国家語へともたらすことであると、Schottelius が考えたと見ることができる。Schottelius が上述のように (vgl.5.1.) 1663年に、来たるべきドイツ語の「第5の時代」の構想として、文法的基礎が与えられることと並んで「完全な辞書が作られる」ことを付け加えたのも、次のことと関連しているであろう: つまり、ひとつには、1663年の時点において、完全な文法は自分自身の文典によってすでに確立されて広く受け入れられていると、Schottelius が考え自負したこと⁶⁷⁾、もうひとつには、1651年から1663年の間に 'Hochdeutsch' が事実それほどに普及の速度を速めていた、いや少なくとも Schottelius の目にはそのように映じたということ。文法的確定が完了を見て、そして 'Hochdeutsch' がその勢力を飛躍的に広げた今となつては、その次のステップとして、辞書の完成がよりはっきりと将来像の必要条件として組み込まれるべきであったのである。

5. 3. ドイツ語の新しい時代の基礎を自らが置いたのだという、1663年における Schottelius の自己認識が、ドイツ語史において事実と見なせるかどうかに関して、Hans Eggers (1969) がひとつの興味深い解答を出している。Eggers の Schottelius 評価と Schottelius の自己評価とは、基本的に一致しているのである。

Eggers によれば、初期新高ドイツ語時代とは、初めは完全な言語上の分裂状態であったが、次第に各地方に「書き言葉 (Schreibsprache)」が形成されて、そのうちのいくつかの優勢な書き言葉がさらに空間的に広まり続けて、ついにひとつの「文章語 (Schriftsprache)」が誕生する時代である⁶⁸⁾。その際に Eggers は、「文章語」たる資格として、広い通用性の他に、指導的な文典によっ

てその文法的規則が確定されていることを挙げ、そのような文典を初めてもたらしたのが、Schottelius であると考えている。⁶⁹⁾ ドイツ語史における Schottelius の重要な意義を、Eggers はさらに次のように説明する：

ひとつの新しい展開が Schottel から始まる。〔であるから〕 Scherer⁷⁰⁾ は、新高ドイツ語時代を Schottel とともに始ませている。〔…〕 もちろん我々も、Schottel が置いた基礎の上に、新高ドイツ語時代のドイツ語という構築物が建てられたのだということを認める。しかしながら、彼は改新者ではない。彼の著作は将来にとって不可欠ではあったが、それ自体がすでに将来を指し示していたわけではない。それよりはむしろ、初期新高ドイツ語時代において非常にゆっくりと道を開いて行き、Luther により最終的な方向を得たところのものの完結者としての Schottelius のほうが、はるかに重要であると我々には思われる。また、初期および後期人文主義的な愛国主義的国語愛が彼の著作のなかで最高潮に達しているという限りにおいても、Schottel は完結者なのである。1650年を時代と時代との境界だと思えば、この Schottel という人物およびこの Schottel の著作が、古いほうの時代から新しいほうの時代に向かって作用したのだということを、ひとは象徴的だと思えすかもしれない。まさに、鋭い区分はできないのである。⁷¹⁾

Scherer のように Schottelius をもって新高ドイツ語時代を始ませるにせよ、Eggers のように Schottelius をもって初期新高ドイツ語時代を終わらせるにせよ、——とりわけ、時代と時代の境界線は明確には引けないとするならば—— Schottelius がドイツ語史上の2つの時代の重要な連結の役割を演じたのだとする認識においては、同じである。⁷²⁾ Schottelius の自己理解においても、自らが完結者であるか創始者であるかは一次的問題ではなく、ただ、(それが始まりであれ完結であれ) 自らの文法的確定という基礎の上に、辞書による登録を経て、とりわけ学問が十分に表現できるような文化語・国家語が形成される日を、第5の時代として待ちわびるのであるから。

6. 結

以上、Schottelius の構想したドイツ語の将来像と文法家の課題とを論究してきた本稿は、つまるところ、二重の意味で「Schottelius とドイツ語の歴史」をめぐることになる。

つまり、ひとつには、Schottelius が、とりわけドイツ語の歴史を引き合いに出すことによって、ドイツ語の擁護と顕揚という時代の要請に答えようとしたという点である。擁護と顕揚の根拠としてのドイツ語史である。ただし、この際の「歴史」とは、太古にあった言語的理想状態がとりわけ、初めての文法家である Schottelius によって取り戻されてドイツ語の墮落的变化が止揚される

に至るプロセスのことであった。もうひとつには、標準的な文章語の完成に向かうドイツ語史のなかで、Schottelius がちょうど重要な結節点に生を受けたという点である。まさに Schottelius のような文法家の存在を必要としたドイツ語史上の17世紀に、Schottelius が登場したのである。しかも、ドイツ語史上この時に託された課題が何であったかは、後世から眺めて初めて見て取れるのではなくて、Schottelius 自身がそれをはっきりと認識していたのである。

註

- 1) Raumer(1870),S.72; また vgl. Ising(1960), S.373; Moser(1965), S.153 [日本語訳]; Eggers(1969), S.199。
- 2) Moser(1965), S.23 [日本語訳]。
- 3) "De vulgari eloquentia"。これは、1304年から1308年の間に書かれたとされる。
- 4) Vgl. 田中 (1978), S.3ff.
- 5) "Gramática de la lengua castellana"。これは、Antonio de Nebrija が1492年に著した。本学のイスパニア語学科の中岡省治氏による翻訳が、本『学報』に継続掲載されている。中岡氏によれば、この文法は「人が生得のものとして持っている母語を尊重してこれを称揚せんとした、ルネッサンスの精神を体現したもの」(Nebrija, S.88) で、その著者の Nebrija は、文法は「文語、学術語にのみ適用しうる『技法』(Arte) であって、日常語としての俗語とは無縁のもの」(ibid) という固定概念を見事に打ち破ったのである。この文典の「序言」には、「私の意図と願ひとは、他でもない、我が国の万物を称揚すること [...]」であり、そこで私は、まずは [...] カスティリア語を技法にまとめ上げ、こうして、今そしてまた今後、カスティリア語で書かれるものが、[...] ギリシア語やことにラテン語にて成就された如く、来るべき時代の永遠の長きに亘り、理解されるものとならんを願うのであります」(Nebrija, S.91) とあり、後述の Schottelius と同じモチーフが示されている。
- 6) Vgl. Arens(1969), S.63. 同様に Kristeva(1981) は、「ルネッサンスとともに、言語学的関心ははっきりと近代諸言語に向か」(S.124) ったと述べている。
- 7) ちょうど15世紀の中ごろに、タキトゥスの『ゲルマニア』が再発見され、これにより、ドイツ民族の歴史性の証明を、聖書からだけでなく、古典古代の文書から行えることとなった。
- 8) Vgl. Ising(1959), S.VIII. 例えば、歴史家の Johannes Aventinus (1477-1539) が、ドイツ語とギリシャ語との類縁性のほかに、ヘブライ語との類縁性も主張した (vgl. Borst,S.1058f.; Bach, S.329)。
- 9) 名前が不詳のため、その発見者 Hermann Haupt(1893) が「上部ラインの革命家」と名付けたところの人文主義者が、16世紀の初めにその見解を打ち出した。この人物によれば、ドイツ人のことが 'alman' と呼ばれるのは、バベルでの言語混乱以前において、ドイツ人の言語が全ての人間つまり 'al-man' の言語であった証拠である (vgl.Borst,S.1051)。ただし、ドイツ語(ゲルマン語)が人類の祖語であるという思想を、広めることになったのは、Johannes Goropius Becanus の "Origines Antwerpianae" (『アントワープ語の起源』: 1569) である。
- 10) すでに、Fabian Frangk が、"Orthographia Deutsch"(1531) の序文のなかで、「ギリシャ語、ラテン語そしてその他の言語で成されたように、完全な文法をこの我が言語にも書き上げることを、私はこの上なく必要なことだと考える」(Müller [1882], S.93.) と述べている。
- 11) Laurentius Albertus の "Teutsche Grammatik oder Sprachkunst"(1573), Albert Oelinger の "Vnderricht der Hoch Teutschen Sprach"(1574), Johannes Clajus の "Grammatica Germanicae linguae" が、それである。

- 12) ドイツ語を全教育の基礎にするという Wolfgang Ratichius の新しい教育論に従って, J.Kromayer がドイツ語で "Deutsche Grammatica, Zum neuen Methodo" (1618) を公刊した。
- 13) 国語協会の意義に関しては, 拙稿 (1982) を参照。
- 14) この文典は, 第1巻「ドイツ語という主幹言語の特徴が手短に示される〔9つの〕賛辞」(S.1-172), 第2巻「語形論 (Wortforschung)」(S.173-552), 第3巻「統語論 (Wortfügung)」(S.553-655) から成る。なお, Weisgerber (1959) は, 参考文献としてこの1641年の文典 (と1663年の著作と) を挙げ, 本文でも1641年の文典を実際に参照したかのような述べているが, その文典の全ページ数を「約900ページ」(S.172) であると言っていること, 「Schottel 自身の内容説明」(ibid) として引用されている箇所は1651年の第2版の文典にのみあるものであることから, またその他の引用文からしても, Weisgerber が1641年の文典を実際には知ってはならず, 参考文献には挙げていない1651年の文典を使用したのは明らかである。
- 15) これは, ドイツ語自身が擬人化され「私」として, 自分自身を特徴づける詩に, とりわけ言語学的な註を多く付したものである。この著作の意義については, 本稿の註72を参照。
- 16) これは, 1641年の文典を拡大・修正した第2版である。第1巻は10の「賛辞」(S.1-313), 第2巻は「語形論」(S.314-866), 第3巻は「統語論」(S.869-897) である。
- 17) これは, Schottelius の研究業績の集大成とされるもので, 第1巻「〔10の〕賛辞」(S.1-170), 第2巻「語形論」(S.171-690), 第3巻「統語論」(S.691-790), 第4巻「詩学」(S.791-997), 第5巻「7つの論文」(S.998-1466) からなり, 最初の3巻が, "Teutsche Sprachkunst" の第3版に相当する。
- 18) これは, 当時最も有力であった国語協会の「実りを結ぶ会 (die Fruchtbringende Gesellschaft)」の会員たちの間の書簡を集めて翻刻したものである。
- 19) 原典からの引用は, 以下, このように本文中にその該当ページ数を示す。
- 20) この「主幹言語 (Hauptsprache)」という名称は, その言語がバベルの塔で生まれた由緒ある言語であることを表す——Schottelius に限らず当時よく用いられた——名称である。これらの主幹言語から, 他の副次的な言語が (例えば, ラテン語からロマンス諸語が) 派生してゆく。Vgl.3.1.
- 21) 以下, 引用文中のブラケットは, すべて筆者による補足である。
- 22) Weisgerber (1959) は, 「W.v.Humboldt が後に明確にしたところの認識を Schottel がまさに先取りしている」(S.183) としている。Weisgerber は言語が「人間の統一性のきづな」であるという Schottelius の言葉を重視するが (S.186), 厳密にはこの言葉は, Schottelius が Th. Bibliander (1504〔?〕-1564) の言葉として引用したものである (vgl.Schottelius 1641,S.106)
- 23) 言語変化の要因は, 例えば, Bibliander(1548) や C.Duret(1613) がすでに論じていた。Vgl. Kayser, S.173f., S.152ff. また, vgl.Metcalf(1953), S.116f.
- 24) Wolf(1984),S.818。Wolf は, 1663年の著作のページを指示しているが, これは, 1663年に初めてではなく, すでに1643年に見られるものである (1641年では, まだ示されていない)。他方 Kayser(1932) は, 歴史家 Aventinus (本稿の註8, 33を参照) のドイツ語史記述以来すでに, Karl 大帝, Rudolf 一世, そして Luther の果たした語史上の役割が重視されていたことを指摘して, Schottelius の行った語史区分を, 「内容的にも形式的にも, 必ずしも新しいものではない」(S.174) と評している。
- 25) 1651年と1663年では, 「第1の時代は, ドイツ語の単語が初めて誕生し造られた」(Schottelius 1651, S.90.;Schottelius 1663, S.48, §55) ときに始まったと, 簡単に表現されている。
- 26) Schottelius 1641,S.72 では, 「数千年前」と言われている。
- 27) カール大帝がそれほどまでにドイツ語の保護に努めた動機を, Schottelius は後年さらに強調している。すなわち, 大帝が勇敢なドイツ人の「国言葉 (Landsprache)」(Schottelius 1651,S.136) の育成に勤勉に努めたのは, ラテン人とギリシャ人の先例にならって, 「一連のまぎれもない良きことを公共の組織と祖国に与える」(ibid) ためであり, もしドイツ語の養育に努めないならば「ドイツ人の福祉と統治とが外国の言葉によって維持されて, 異質な外国語の話し方によって, 実直

- なドイツ人の心の動きをいわばドイツ的でなくしてしまうことになる」(Schottelius 1663, S.172. §2.) と、考えたからである。
- 28) このような Rudolf 一世の方針を受け継いで、Maximilian 一世は1512年のケルンでの帝国議会で、「帝国の命により、議会では記録書類はドイツ語以外では受け入れてはならない」(Schottelius 1641,S.33) ことを確認したのである。
- 29) Schottelius は、1642年に「実りを結ぶ会」への入会が認められた。その翌年 Schottelius は、"Der Teutschen Sprach Einleitung" (1643年) を、会長の Ludwig 侯に献じている。
- 30) その際、Schottelius は、自分が古典古代以来の論争に関わっているということを知っている：「それら〔単語〕がその起源からして、自然によっているのかそれとも選定(Chur)によっているのか、つまり、恣意的(wilkürlich)なのかそれとも自然的であるのかどうかは、昔からの論争点である。たいていの哲学者は、——ギリシャ語とラテン語の単語に関して——語は偶然的な力によってではなくて、自然の特別な力と深い理性から生まれたという結論を出した。〔…〕プラトンは、それは超人間的な能力により生まれたのだと述べた」(Schottelius 1643, S.73)。Coseriu(1967) は(S.86)、「言語の恣意性」という概念をソシュールに由来すると考えることは、「言語学史の知識の欠如」による「視覚的幻影」であって、この概念はアリストテレス以来の伝統であることを主張している。その際、Coseriu は「我々の知るかぎり初めて近代語において 'wilkürlich' という語が、単語に関係して使われている」のは、Schottelius の1663年の著作(の S.64)においてであると述べているが、この確定は不適切である。この語は厳密には——筆者の引用文が示すように——すでに1643年に(また1651年でも S.130 で) Schottelius が述べていることである。Vgl. auch Coseriu(1973),S.15 [日本語訳]。
- 31) しかし Schottelius は、ヘブライ語太初言語説を、1651年の "Teutsche Sprachkunst" の第2版以後は採った。Vgl. Metcalf(1953), S.119f.
- 32) Schottelius が「ドイツ語(Deutsch)」と言う場合、「ゲルマン語」を表している場合と、「ドイツ語」を表している場合とがある。
- 33) 旧約聖書上の人物であるアシケナスを、ドイツ人の祖先とする考え方は、Aventinus に由来する。Vgl. Engels(1983), S.23。
- 34) Borst,S.1144。この種の愛国主義的な盲目性は、ドイツに限らず、16・17世紀には、ヨーロッパで母語を顕揚する際に一般的に見られた傾向である。
- 35) 例えば、「かれら〔ギリシャ人〕のところで、すべてがヘブライ人の古さと比べると、あたかも昨日か今日にできあがったかのように新しい。しかし、このヘブライ人の古さとドイツ人のそれとは同等である。」(Schottelius 1641,S.68)。この同じ箇所が、1663年では、「多くにおいて同等である」(Schottelius 1663, S.37. §26) と、制限的な表現に変えられていることは、後年ヘブライ語を太初言語と認めたことと関連するのであろう。
- 36) Vgl.Dyck,S.82f.
- 37) ここには、当時一般的であった「文字」と音声との混同がある。なお、文字については、ドイツ人が文字をラテン人から借用したという主張に対抗して、Schottelius は、ドイツ人が太古の時代からすでに文化的な文字を有していたとしている：つまり逆に「ローマ人が〔…〕太古のケルト語から、そのようにさまざまな語、慣習、美德だけでなく、文字をも受け入れ借用した」(Schottelius 1641,S.76) のであり、「文字」という意味の Letter という語は、太古のドイツ語の語根であって、ラテン語の語根ではない」(Schottelius 1641,S.77)。
- 38) 主幹言語の間(とりわけドイツ語とヘブライ語との間)に見られる類似性については、バベルでの出来事が「混乱であって、〔まったく〕新しい言語の創造ではなかったこと」(Schottelius 1641,S.61) によって説明している。
- 39) これは、Scrieckius Rodornius の言葉(1614)を、Schottelius が引用したものである。
- 40) Schottelius の語分析理論では、語根は一音節でなければならないのである。これについては、後述の4.2.を参照のこと。ドイツ語(ゲルマン語)の語根が一音節だという思想は、既述(vgl. 註9)の Becanus (1569) に由来し、オランダ、ドイツの他に、同時代のイギリスでも、主張された；vgl. 渡部(1965),S.236ff.u. S.268.
- 41) オランダ語とドイツ語とは同じ起源である、つまりどちらも「ドイツ語」(「古ケルト語」)に由来するのであるから、Schottelius は Stevin の挙げる数値をドイツ語の数値と見なせた。なお、とりわけ(独立運動の始まった)16世紀後半のオ

- ランダは、国語育成の気運が高まり、1600年頃にその頂点に達していた。ドイツの国語育成運動は、このオランダから相当の刺激と模範を得ていた。これについて詳しくは、vgl. 拙稿 (1980)。
- 42) 1651年以降は、Stevinの算出した数字も、「我々の語根の全数ではない」(Schottelius 1651, S.123; Schottelius 1663, S. 61. § 33) とし、1663年には実際に著作のなかで、約5000の語根を Schottelius 自らが収集している (Schottelius 1663, S. 1277-1450.)。
- 43) 1663年では、同じ箇所、ドイツ語の派生語の数は「数え切れない」(Schottelius 1663, S.319. § 4) と、表現が変えられている。
- 44) Schottelius は後年、このような語根の「生き残りの破片」(Schottelius 1663, S.1272. § 2) に多く言及している。さらに、*ergetzen*, *verderben*, *Armuh*, *Antlitz*, *ewig* のように派生語と合成語のなかにも未知の語根が隠されていることにも触れている (Schottelius 1651, S.826; Schottelius 1663, S.655.)。
- 45) Vgl. Fricke, S.118。
- 46) とはいえ、なにごとく最初から完全であるということは考えられず、「このまったく新しい本書において、ところどころでちょっとした弱点が見いだされるにちがいない」(Schottelius 1641, S.176) と認めている。
- 47) Schottelius は言う：「Varro は驚嘆するほどに多くを読み、誰もほとんど読み切れないほどに多くのものを書き、[...] ラテン語をさらに確固と基礎づけ、ラテン語の起源と大きさを示し始めた。Cicero 自身が、Varro についてこう語っている：[...] 高い学識ある Varro よ、あなたがそれを成したのだ、あなたの本により、我々は自らの言葉を初めて本当に知り、我々は初めてわが家に戻り、我々が誰であり、どこにいて、そして何であるのかが、初めてわかったのである。」(Schottelius 1641, S.69f.)。そして事実、1651年の「Teutsche Sprachkunst」への「祝辞」では、Schottelius は Johann Wilhelm von Stubenberg と Georg Philipp Harsdörffer によって、「ドイツの Varro」(Schottelius 1651, Bl.B3r, Bl.B4v) と呼ばれた。
- 48) 「語根 (radix)」という概念は、J.Reuchlin の「De rudimentis hebraicis」(『ヘブライ語入門』：1506) 以来広く知られ、ギリシャ語とラテン語にもこの概念を適用しようとしたが (vgl. Arens[1974], S.66; Jelinek[1913], S.138), これをドイツ語という平俗語に適用した点で、Schottelius は「草分け的」(Lockwood[1969], S.12) なのである。
- 49) ただし、1651年以後は、この「偶性語尾」は「派生の主要語尾」とともに、すべてが一音節であるところの「言語の小枝」とされている (Schottelius 1651, S.140; Schottelius 1663, S.68f. § 6, § 7)。屈折語尾は不安定で、語源を探るにはほとんど役立たないと、Schottelius は考える (vgl. Metcalf [1974], S.246) が故に、これについての言及は少ない。
- 50) 例えば、(発音的でなく) 語源的な正書法の原則が、次のように根拠づけられている：「偶性〔語尾を表す〕文字 (zufällige Buchstaben), 〔派生語尾を表す〕本質的な文字 (wesentliche Buchstaben), 語根〔を表す〕文字 (Stammbuchstaben), この3つは、それぞればらばらにせず、書く場合にひとまとまりにせねばならない」(Schottelius 1641, S.192)。
- 51) この「Vorwort」は、古典古代の文法論と同じく、今日言うところの前置詞と前綴との両方をカバーしている。前綴は、ラテン文法的には語根に等しく、一方ヘブライ文法的には派生語尾と同じ資格であるため、結局このジレンマから、Schottelius は語を構成する際の「Vorwort」を説明するときに、「Vorwort」をひとつの独立した要素のように扱ったものと考えられる。これについては、拙稿 (1979a), S.29f. と拙稿 (1979b), S.31 を参照。
- 52) Vgl. Henne (1975), S.10。
- 53) 1641年には、「Grundrichtigkeit」という名詞形は一度も見られず、ただ形容詞の「grundrichtig」が一度だけ用いられるだけで、しかもその形容詞も「類比的」という意味であるとは解釈しにくい。1643年に初めて、「類比的」と解釈できる用いられ方がなされ、形容詞が9度、名詞形が2度用いられている。1651年、1663年と、後年になるほど、この語を Schottelius は非常に好んで用いた：名詞形が、7度 (1651年) と19度 (1663年)、形容詞形が14度 (1651年) と21度 (1663年)。これに関して詳しくは、拙稿 (1985) を参照。
- 54) 1640年代の Schottelius と Gueintz の論争では、Analogie 対 Anomalie という表現で議論されずに、「規則」対「慣用」という論じられ方をしたが、1651年には、Schottelius は「ギリシャ語においてもラテン語においても、言語が analogia に従うとみなす人と、anomalia に従うとみなす人とがいた」(Schottelius 1651, S.5) と述べて、自分自身が長い伝統のある

Analogie-Anomalie 論争のなかにいることを意識した。これについては、拙稿(1985), S.134, S.141 を参照。

- 55) Schottelius と Gueintz の文典の相違について詳しくは、拙稿(1981)を参照。
- 56) Schottelius は、言語に限らず、「地上的なすべてのものには常にうつろいやすさがあり続ける」(Schottelius 1641,S.54f.)と、まさにバロック的な無常観を口にする一方で、このようにこれまたバロック的な永遠の追求もする:「年月に打ち勝ち、時間の暴力のなかを突破するところのものなかに、何か神的なものが、そして何か永遠に継続するものが隠されているにちがいないと、ひとは確信するに至ったのである」(Schottelius 1641,S.56)。
- 57) Vgl. Jellinek, S.129f.
- 58) 1641年にも、おおよその輪郭はすでに示されてはいる:「どの単語をもそれが属する語根のもとに示し、さまざまな著述家からの良い用例を添えて説明する」(Schottelius 1641,S.9)。
- 59) Henne (1975) は、1640年代に学識者の間でドイツ語の辞書論をめぐる激しい議論があったと述べたあと、「Harsdörffer が初めて1648年にまとめたドイツ語辞書の綱領を提示した」(S.17)としている。しかしそれよりすでに5年早い1643年に、Schottelius がこのような辞書論を示していたのである。
- 60) なお、1651年以降には、さらに第8項目として、鉱業、漁業、書籍印刷業、技法、学問等の専門用語を説明し、また慣用句や諺を示すことが、要請されている(Vgl. Schottelius 1651, S.299f.; Schottelius 1663, S.160. §18)。
- 61) Schottelius は、すでに合成語の2成分性を認識している。つまり、今日言う「規定語」と「基礎語」とを、次のように説明する:「合成語はみな、それがどのような種類であっても、また長くても短くても、2つの成分(Glied)に分けられる:一方は基礎語(Grund), 他方は添加語(Beyfügig)という名である。[...] 合成語の基礎語(すなわち主要成分)とは、常に[...] 主要な意味を担い、いつも合成語のなかで後ろのほうの位置を占めるものである」(Schottelius 1641,S.108)。そして、「合成語の性は、常に基礎語[の性]に従わねばならない」(Schottelius 1641,S.113)。この Schottelius の合成語に関する観察を、例えば今日の Johannes Erben の叙述と比較するならば、合成語の観察に関してこの3世紀半の間に——専門術語面ではたしかに近代的な衣を身につけたものの——根本的な「進歩」のないことに驚く: Erben によれば、合成語は、「普通——『直接構成要素』として分析される——2つの主要成分を有する」(Erben[1975], S.28); 「語を閉じる第2成分は、[...] その複合体全体の文法的機能クラス(品詞、およびそれに結び付いたカテゴリー、例えば性)を確定し、また表されるものが所属すべき概念的の基本クラスを確定する」(Erben[1975], S.58)。
- 62) これは、Harsdörffer が Ludwig 侯に宛てた書簡(1647年12月7日付)のなかで、Schottelius の言葉として伝えたものである。
- 63) また、1651年以後に付け加えられた第8番目の要請に答えるべく、1663年には諺と慣用句を約2500集めている(Schottelius 1663, S.1112-1147)。
- 64) Vgl. Powitz, S.12-14.
- 65) 後年の1663年に Schottelius がはっきりと述べている言い方では、「言語において文法が根本的に作られ、一般的に認められるようになるよりも先に、その言語に辞書を作ることはできない」(Schottelius 1663, S.173f. §6)のである。
- 66) 1663年には、規範としての権限を言語慣用にも与えているのに対し、1651年には、規範としては 'Grundrichtigkeit' のみが認められ、これを一貫させようとしている。筆者は1651年の文典を、Schottelius の「類比主義者宣言」の書であると特徴づけた。これについて詳しくは、拙稿(1985)を参照。
- 67) 例えば、1663年の著作の冒頭で Schottelius は次のように述べている:「20年も前に[...] 第1版の本はほとんどドイツ全土に送られ、多くの高貴な学識者たちの賛成の意見が[...] 届いたので、その文典を大巾に増補して、10年前に再び印刷をし世に出した。そしてまた、その版も絶版となり、以前の出版人がさらにもう一度出版し直す準備を整えた」(Schottelius 1663, S.2)。
- 68) Vgl. Eggers(1969), S.203.
- 69) Vgl. Eggers(1969), S. 198f. u. S. 201.
- 70) Wilhelm Scherer が1875年に、「Zur Geschichte der deutschen Sprache」(Berlin: 2. Aufl.)において初めて、「中高ドイツ語時代」から「新高ドイツ語時代」への移行段階として、「初期新高ドイツ語時代」を設定した。

71) Eggers(1969), S.203.

72) またこれに関連して, Eggers は次のように述べている:「Scherer は, 1663年の Schottel の著作『Ausführliche Arbeit』を, この時代の最初の記念碑と見なしている。我々は逆に, Schottel のその後の著作の基本思想がすべてすでに含まれている1641年の『Sprachkunst』に最大の重きを置く」(Eggers[1969], S.203)。筆者の見限りでは, 1641年の著作において, ——'Hochdeutsch' 観と言語規範観とが後年大きく揺れ変遷する(詳しくは, vgl. 拙稿〔1985〕)のではあるが——Schottelius の思想の基本線はたしかにすでに打ち出されているので, Eggers の考え方を筆者は支持する。ただし, 厳密には1641年でなく, 1641/43年としたほうが良いであろう。というのも, 言語変化の要因, ドイツ語史の時代区分, 辞書論のような重要な事項が初めて言及されるのは, 1643年であるから。すなわち, 1643年の著作は, 1641年には時間的都合により果たせなかった論述を急いで補った著作であると見なすべきだと, 筆者は考える。その意味での1643年の著作の重要性は, 今まであまり認識されていないようである。

文献一覧

原典

- Gueintz, Ch. (1641): Deutscher Sprachlehre Entwurf. Cöthen. [Nachdruck: Hildesheim/New York 1973.]
- Krause, G.(Hg.) (1855): Der Fruchtbringenden Gesellschaft ältester Ertzschrein. Leipzig. [Nachdruck: Hildesheim/New York 1973.]
- Müller, J. (Hg.) (1882): Quellenschriften und Geschichte des deutschsprachlichen Unterrichtes bis zur Mitte des 16. Jahrhunderts. Gotha. [Nachdruck: Hildesheim/New York 1969.]
- Nebrija, A.de (1492): Gramática de la lengua castellana. [中岡省治訳: 『カスティリア語文法』(翻訳一1), 『大阪外国語大学学報』70—1 (言語編), 1985]
- Schottelius, J.G. (1641): Teutsche Sprachkunst. [1. Aufl.] Braunschweig.
- Schottelius, J.G. (1643): Der Teutschen Sprach Einleitung. Lüneburg.
- Schottelius, J.G. (1651): Teutsche Sprachkunst. [2. Aufl.] Braunschweig.
- Schottelius, J.G. (1663): Ausführliche Arbeit Von der Teutschen HauptSprache. Braunschweig. [Nachdruck: Tübingen 1967.]

二次資料

- Arens, H. (1974): Sprachwissenschaft. Der Gang ihrer Entwicklung von der Antike bis zur Gegenwart. 2 Bde. Frankfurt/M.
- Bach, A. (1970): Geschichte der deutschen Sprache. Heidelberg.
- Borst, A. (1960): Der Turmbau von Babel. Geschichte der Meinungen über Ursprung und Vielfalt der Sprachen und Völker. Band III. Umbau. Teil I. Stuttgart.
- Coseriu, E. (1969): "L'arbitraire du signe. Zur Spätgeschichte eines aristotelischen Begriffs." In: Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen. Bd.204.
- Coseriu, E. (1973): Lezioni di linguistica generale. Torino. [下宮忠雄訳, 『一般言語学入門』三修社 1979]
- Dyck, J. (1974): "Rhetorische Argumentation und poetische Legitimation. Zur Genese und

- Funktion zweier Argumente in der Literaturtheorie des 17. Jahrhunderts" In: H.Schanze(Hg.): Rhetorik. Beiträge zu ihrer Geschichte in Deutschland vom 16.-20. Jahrhundert. Frankfurt/M.
- Eggers, H. (1969): Deutsche Sprachgeschichte. III. Das Frühneuhochdeutsche. Reinbeck.
- Engels, H. (1983): Die Sprachgesellschaften des 17. Jahrhunderts. Gießen.
- Erben, J. (1975): Einführung in die Wortbildungslehre. Berlin.
- Fricke, G. (1933): "Die Sprachauffassung in der grammatischen Theorie des 16. und 17. Jahrhunderts" In: Zeitschrift für deutsche Bildung. 9.
- Henne, H. (1975): "Deutsche Lexikographie und Sprachnorm im 17. und 18. Jahrhundert" In: H.Henne (Hg.): Deutsche Wörterbücher des 17. und 18. Jahrhunderts. Einführung und Bibliographie. Hildesheim/New York.
- Ising, E. (1959): Wolfgang Ratkes Schriften zur deutschen Grammatik (1612-1630). Teil I: Abhandlung. Berlin.
- Jellinek, M.H. (1913): Geschichte der neuhochdeutschen Grammatik. 1.Halbband. Heidelberg.
- Kayser, W. (1932): Die Klangmalerei bei Harsdörffer. Ein Beitrag zur Geschichte der Literatur, Poetik und Sprachgeschichte der Barockzeit. Göttingen.
- Kristeva, J. (1981): Le langage, cet inconnu. Paris. [谷口勇/枝川昌雄訳, 『ことば, この未知なるもの——記号論への招待——』, 国文社 1983]
- Lockwood, W.B. (1969): Indo-European Philology. London. [永野芳郎 訳『比較言語学入門』, 大修館 1976.]
- Metcalf, G.J. (1953): "Schottel and historical linguistics" In: The Germanic Review. 28.
- Metcalf, G.J. (1974): "The Indo-European hypothesis in the sixteenth and seventeenth Centuries . In: D.Hymes(Hg.): Studies in the History of Linguistics. Berlin/New York.
- Moser, H. (1965): Deutsche Sprachgeschichte. Mit einer Einführung in die Fragen der Sprachbetrachtung. Tübingen. [国松孝二他訳, 『ドイツ語の歴史』, 白水社 1967]
- Powitz, G. (1959): Das deutsche Wörterbuch Johann Leonhard Frischs. Berlin.
- Raumer, R.v. (1870): Geschichte der Germanischen Philologie vorzugsweise in Deutschland. München. [Nachdruck: New York 1965.]
- 高田博行 (1979 a) 「J.G.Schottelius の造語理論」, "Sprache und Kultur" (大阪外国語大学ドイツ語研究室編), 第14号
- 高田博行 (1979 b) 「J.G.Schottelius における "Stammwort" という概念」, 『外国語・外国文学研究』(大阪外国語大学大学院修士会編), 第3号
- 高田博行 (1980) 「バロック時代における外来語との戦い——ドイツとオランダの一接点——」『中・北欧比較文化研究(1)』(大阪外国語大学編)
- 高田博行 (1981) 「バロック時代のドイツ語文典——Ch.Gueintz と J.G.Schottel との比較研究試論——」, 『ドイツ文学論叢』(阪神ドイツ文学会編), 第23号
- 高田博行 (1982) 『『国語協会』の評価をめぐって——国語協会研究の現状——』, "Sprache und Kultur" 第16号
- Takada, H. (1985): "J.G.Schottelius, die Analogie und der Sprachgebrauch. Versuch einer Periodisierung der Entwicklung des Sprachtheoretikers." In: Zeitschrift für Germanistische Linguistik. (Berlin/New York) 13.

田中克彦 (1978) 『言語からみた民族と国家』, 岩波書店。

渡部昇一 (1965) 『英文法史』, 研究社。

Weisgerber, L. (1959): Die geschichtliche Kraft der deutschen Sprache. Düsseldorf.

Wolf, H. (1984): "Die Periodisierung der deutschen Sprachgeschichte." In: W.Besch/O. Reichmann/S.Sonderegger(Hg.): Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung. Berlin/New York.